

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ

平成18年3月

加古川市教育委員会

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ

平成18年3月
加古川市教育委員会

序 文

加古川市は豊かな自然に恵まれるとともに、近年では播磨臨海工業地域の一員としても発展しています。市域には、約620箇所もの埋蔵文化財が存在しており、当市の長い歴史を今に伝えています。

これらの遺跡については、開発行為にともなう緊急調査などの理由で、毎年発掘調査が実施されています。今回刊行した報告書は、平成4年度に、国庫補助事業によって実施した溝之口遺跡の発掘調査報告書です。小規模な発掘調査には制約があるため、十分な調査成果を上げたとは必ずしも言えませんが、この報告書が、当市の歴史を理解する上で一助となれば幸いに思います。

最後に、それぞれの発掘調査に際して、ご指導・ご協力をいただきました兵庫県教育委員会、加古川市文化財審議委員会、並びに地元の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成18年3月

加古川市教育長

山本 勝

例　言

1. 本報告書は、加古川市教育委員会が平成4年度に実施した、溝之口遺跡発掘調査の報告書である。調査地は、加古川市加古川町美乃利354他である。調査地は水田として利用されていた。
2. 本書に掲載した発掘調査は国庫補助事業（国庫補助50%・県費補助25%・市負担25%）によって実施したものである。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体者	加古川市教育長　松岡弘宗
調査担当者	加古川市教育委員会　社会教育・文化財課　岡本一士 西川英樹
調査作業員	田中鉄二・田中敏・大西龍男・大西捨夫・井垣岩男・赤松正一 玉岡茂市・中山茂・岩佐力三・大西敬一・藤井正志・采野尚子 南良子・柿本ゆり子・遠藤晴美・石原佳織・児嶋美佳子・東久代 高松八重子
4. 本報告書の編集は、西川英樹が行なった。
5. 本報告書における土層及び土器の色調は、「新版 標準土色帖 1991年版」を参考にした。
6. 発掘調査および報告書作成に関しては、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所岸本一宏氏・森内秀造氏から指導・助言を受けた。記して感謝します。
7. 本書に係る図面・写真・遺物は、加古川総合文化センター収蔵庫に保管されている。

目 次

本文目次

第1章	遺跡の位置と環境	1
第2章	既往の調査成果	6
第3章	調査成果	8
第1項	発掘調査の概要	8
第2項	遺構	9
第3項	遺物	16
第4章	まとめ	24

挿図・表目次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	溝之口遺跡位置図	5
第3図	発掘調査位置図	9
第4図	溝之口遺跡遺構平面図	11
第5図	土層断面図	14
第6図	溝之口遺跡遺物実測図	20
第7図	遺構分布図	25
第1表	周辺遺跡分布図地名表	4

写真図版

写真図版1	溝之口遺跡航空写真
写真図版2	溝之口遺跡発掘調査写真
写真図版3	溝之口遺跡発掘調査写真
写真図版4	溝之口遺跡発掘調査写真
写真図版5	溝之口遺跡発掘調査写真
写真図版6	溝之口遺跡出土遺物写真

写真図版7 溝之口遺跡出土遺物写真
写真図版8 溝之口遺跡出土遺物写真
写真図版9 溝之口遺跡出土遺物写真

第1章 遺跡の位置と環境

溝之口遺跡の所在する加古川町は、沖積地と氾濫原によって形成された地形である。加古川は日岡山と升田山に挟まれた狭窄部以南では、幾筋にも枝分かれし、広い低地部を形成する。溝之口遺跡は、加古川左岸の加古川町美乃利から溝之口にかけて形成された沖積地の微高地上に所在している。加古川町の南側に位置する尾上町では、北側に三角州、南側の海岸近くに砂州が広がる。

周辺の遺跡において最も早い時期に形成されたのは、旧石器時代の散布地である日岡山遺跡である。この遺跡は日岡山南斜面に位置し、標高は約20~30mである。チャートと安山岩製のナイフ形石器および黒曜石製の細石刃石核などが採集されている。

周辺の縄文時代の遺跡は顕著ではない。市内では、八幡町宮山遺跡から縄文時代後期の住居跡や集石遺構が検出されている。櫻本誠一氏・松下勝氏共著の『日本の古代遺跡3兵庫県南部』において報告されているところでは「半月形にならべた集石遺構や、円形の住居跡が発見されている」と記されている。しかし、正式な発掘調査報告書は刊行されておらず、詳細は不明である。

弥生時代の遺跡としては、溝之口遺跡の北側に位置する美乃利遺跡が、弥生時代前期から、加古川下流左岸地域の自然堤防上に形成された。平成2・3年に兵庫県教育委員会によって発掘調査が実施された。その結果、弥生時代前期・中期・後期、奈良・平安時代、鎌倉時代の各時代の遺構が検出された。弥生時代前期は、水田跡・溝・土壙、弥生時代中期・後期は住居跡、奈良時代は掘立柱建物跡・溝などを検出した。平安時代は掘立柱建物跡・井戸・木棺墓・畑、鎌倉時代は水路などである。溝之口遺跡は、美乃利遺跡の南側に隣接し、弥生時代から平安時代の遺構・遺物が検出されている。弥生時代中期中葉から発展する遺跡であり、拠点集落と考えられている。野口町の段丘上に形成された坂元遺跡は弥生時代から鎌倉時代の遺跡である。坂元・野口土地区画整理事業にもなって平成15年から発掘調査が実施された。その結果、竪穴住居跡・方形周溝墓群・水田・掘立柱建物跡・古墳・6世紀の埴輪窯跡など、弥生時代から鎌倉時代の多くの遺構が検出された。

溝之口遺跡の南側に広がる微高地上には、平野遺跡・北在家遺跡・粟津遺跡・今福遺跡などの小規模な集落跡が点在する。また、段丘上には良野遺跡・長砂遺跡が所在する。北在家遺跡は、1971年に鎌木義昌氏・上田哲也氏によって発掘調査が実施された。遺構は、古墳時代の竪穴住居跡3棟、平安時代の掘立柱建物跡1棟などである。

古墳時代になると日岡山に4ないし5基の前方後円墳が築造された。日岡陵・南大塚古墳・勅使塚古墳・西大塚古墳である。北大塚古墳は宅地開発によって、前方部が破壊されたため、墳形や規模が不明確であるが、最も後出の大形古墳と考えられる。これ以外にも、西車塚古墳・狐塚古墳などが現存する。また、土取りによって消滅した東車塚古墳からは、三角縁唐草文帯二神二獣鏡一面が出土した。これは、神戸市ヘボソ塚古墳の

出土鏡と同範である。

日岡山には、この他にも約20基の群集墳が形成されていた。しかし、日岡山公園の造成工事によって、ほとんど破壊されたようである。採集された遺物には、6世紀後半から7世紀前半頃の須恵器等が知られている。

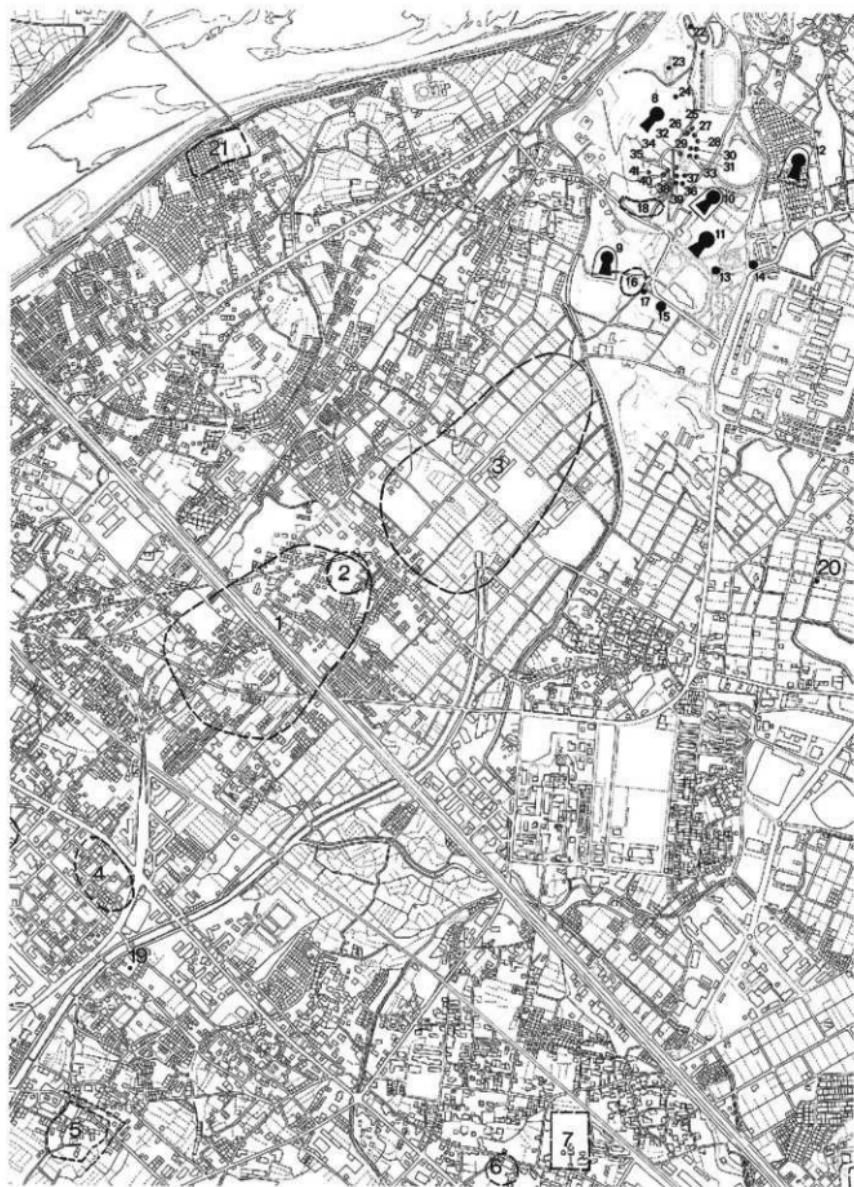
野口町長砂には野口段丘の南西縁に、聖陵山古墳が所在する。全長約70mで、前方後円墳とも前方後方墳とも考えられている。天文年間に銅鏡が出土したとされ、現在7本が同地の円長寺に伝えられている。

野口町良野には、具平塚古墳が存在する。現在、直径約10m程度の半円形を呈し、高さ約5m程度の高まりが残されているが、相当破壊されていると見られる。かつては、もっと大きく方形であったというが、詳細は不明である。また、坂元遺跡からは、削平を受けた古墳時代後期の古墳が発見された。このほかにも、埴輪を焼成した窯1基が発見された。これは段丘崖を利用した6世紀代の登窯で、幅2m、長さ4.5mの規模である。形象埴輪を主体にして焼成している事に特徴があり、人物・家・馬・鹿・盾などが焼成されていた。盾形埴輪は石見型であった。

奈良時代には、野口町野口に野口廃寺が造営された。平成6・7年度に加古川市教育委員会による発掘調査が実施され、塔跡・講堂跡などの遺構が確認された。また、その南側には、古代山陽道の賀古駅家と考えられている古大内遺跡が所在する。播磨国府系瓦を主体とする多数の瓦が出土しているが、駅家の明確な遺構は発見されていない。坂元遺跡は、発掘調査の結果、奈良時代には賀古駅家を維持するムラであったと評価された。一方、溝之口遺跡も古墳時代後期から、再び多くの遺構・遺物が出土する。特に奈良時代から平安時代前期には、多くの遺構・遺物が出土しており、通常の集落とは異なる官衙的性格を有するのではないかとの指摘がなされている。

参考文献

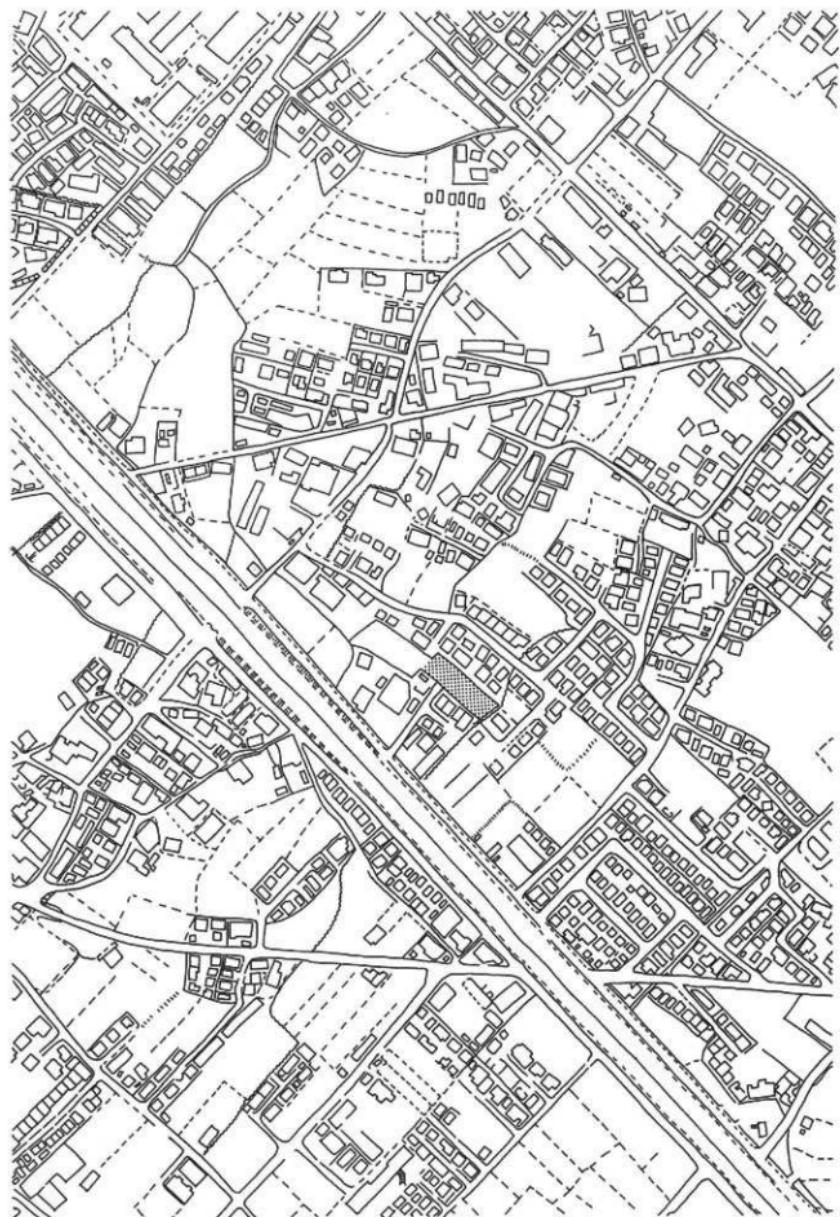
- 榎本誠一・松下勝 「日本の古代遺跡3 兵庫県南部」保育社 1984年
田中眞吾 「加古川市付近の地形と地質」「加古川市史第1巻」加古川市 1989年
西谷真治 「加古川流域の地方勢力」「加古川市史第1巻」加古川市 1989年
西谷真治・置田雅昭 「加古川市の考古遺跡と遺物」「加古川市史第4巻」
加古川市 1994年



第1図 周辺遺跡分布図

1	溝之口遺跡	22	日岡山1号墳
2	溝之口廃寺	23	日岡山2号墳
3	美乃利遺跡	24	日岡山3号墳
4	平野遺跡	25	日岡山4号墳
5	細田構居跡	26	日岡山5号墳
6	野口城跡	27	日岡山6号墳
7	野口廃寺	28	日岡山7号墳
8	ひれ墓古墳	29	日岡山8号墳
9	勅使塚古墳	30	日岡山9号墳
10	西大塚古墳	31	日岡山10号墳
11	南大塚古墳	32	日岡山11号墳
12	北大塚古墳	33	日岡山12号墳
13	西車塚古墳	34	日岡山13号墳
14	東車塚古墳	35	日岡山14号墳
15	狐塚古墳	36	日岡山15号墳
16	日岡遺跡	37	日岡山16号墳
17	日岡山壺棺墓	38	日岡山17号墳
18	日岡山遺跡	39	日岡山18号墳
19	具平塚古墳	40	日岡山19号墳
20	水足1号墳	41	日岡山20号墳
21	中津構居跡		

第1表 周辺遺跡分布図地名表



第2図 溝之口遺跡位置図

第2章 既往の調査成果

溝之口遺跡は、1967年加古川バイパス建設時に、地元の中学生梶原幸次氏によって発見された。しかし、発見時にはバイパス本線はすでにほとんど完成していた。兵庫県教育委員会と加古川市教育委員会は、建設省姫路工事事務所と協議を行い、国道建設工事を中断して、1968年5月19日から7月19日まで、発掘調査を実施した。調査成果は「播磨・東溝弥生遺跡Ⅰ」として1969年に刊行された。

第1次調査では、竪穴住居跡2棟・溝6本・木棺墓2基・盛土土壙2基が検出された。住居跡は、一辺7.4mの方形竪穴住居跡1棟（住居址1）と直径約8mの円形住居の外側に、幅約1.3mから1.5mの扇形の高床部を有する竪穴住居跡1棟（住居址2）である。時期は、住居址1、2ともに弥生時代後期後半である。盛土土壙2は、2.22m×1.26m、深さ50cmの規模で、多量の土器が検出された。そして、すべて畿内第Ⅲ様式（古）段階の土器のみの資料である事が報告書に明記された。

1969年1月10日から3月1日に第2次調査が実施され、同年7月15日から10月9日に第3次調査が実施された。調査は、当時兵庫県教育委員会嘱託職員であった石野博信氏と松下勝氏が中心となって行われた。第2次・第3次調査の成果は、「播磨・東溝弥生遺跡Ⅱ」として1969年に刊行された。

第2次調査と第3次調査では、畿内第Ⅳ様式併行期で直径9.4mの円形竪穴住居跡（住居址3）、同じ時期に属する直径6.1mの円形竪穴住居跡（住居址4）、弥生時代後期で、推定直径9.6mの円形竪穴住居跡（住居址6）、推定畿内第Ⅳ様式併行期で直径6.4mの円形竪穴住居跡（住居址9）、畿内第Ⅲ様式併行期で、直径7.2mの円形竪穴住居跡（住居址10）、古墳時代前期で、長辺4.3m、短辺3.4mの方形竪穴住居跡（住居址8）、平安時代で、2間×2間の掘立柱建物跡（建物址1）、推定平安時代で、1間×2間の掘立柱建物跡（建物址2）となっており、合計で竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡2棟である。

その後、宅地開発にともなう緊急調査が繰り返され、現在に至っている。遺跡の名称は、当初子字名をとって東溝遺跡と名づけられたが、その後、遺跡の広がりが大きいことが確認されたため、大字名をとって、溝之口遺跡と改められた。緊急発掘調査の成果は、「溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ」として1992年に刊行された。この報告書には、1983年から1988年までの調査成果が記載されている。また、1989年刊行の『加古川市史第1巻』および1994年刊行の『加古川市史第4巻』にも、調査成果がまとめられている。

『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』では、主に宅地開発による緊急発掘調査の成果がまとめられている。調査地域は、すべて加古川バイパスの北側であり、溝之口遺跡の広がりの大きさが示されている。主な遺構は弥生時代中期の竪穴住居跡3棟、弥生時代後期竪穴住居跡1棟、同じく中期の方形周溝墓8基、円形周溝墓1基、古墳時代の竪穴住居跡12棟、奈良時代の掘立柱建物跡38棟である。

これらの調査成果を総合すると以下のようになる。まず、弥生時代前期から中期初頭の遺構としては、1987年調査の焼成土壙1などがあるが、遺物は散見される程度で、量的に乏しい。しかし、弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式古段階）には、遺構・遺物とも爆発的に増加する。この時期の資料には、土壙2の一括資料の他、溝出土資料や方形周溝墓出土資料など豊富である。凹線文出現以後の第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式にかけては、第2次・3次調査で、竪穴住居跡が3棟検出された。また、1988年の調査においても溝1から多くの土器が出土している。このため、引き続き集落が営まれたと考えられる。後期は、第1次調査で、竪穴住居跡2棟、第2次・第3次調査で竪穴住居跡1棟、1987年の調査においても竪穴住居跡1棟が検出されたが、遺構は加古川バイパス付近の遺跡南側に偏る傾向があり、全体的には出土資料は少ない。

古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居跡なども確認されているが、後期の遺構が多い。この時期の集落と日岡山丘陵の群集墳に関連性があるのではないかとの指摘もある。

また、奈良時代から平安時代の8世紀から9世紀の遺構・遺物も非常に多い。多数の掘立柱建物跡が確認されている。掘立柱建物跡は3間×2間が最も多く、ついで2間×2間が多い。しかし、1983年第2次調査第1調査区のSB12は、床面積が最も大きい建物である。同時期と考えられるSB02・SB03・SB11などとの関連から、コ字状の建物配置が想定されている。また、1983年第2次調査第3調査区において検出されたSB05は、調査区外まで広がるため、全体の大きさは不明であるが、桁行は5間以上有り、検出された範囲の床面積で約40m²ある。この調査区から、9世紀頃の土器が多く含む井戸が1基検出された。この中より墨書き土器・弓・斎串などが出土した。墨書き土器は「大穀」「長」「田村南」などと判読できるものである。

奈良時代から平安時代の遺物は、墨書き土器の他、綠釉陶器、白磁、硯、石帯、木簡（1点）、鞍橋などが出土する。また、遺跡内の各所から布目瓦が出土する。これらのことから、通常の集落とは異なる性格が考えられる。

参考文献

- 松下勝・石野博信 「播磨東溝弥生遺跡Ⅰ」 加古川市教育委員会 1968年
松下勝・石野博信 「播磨東溝弥生遺跡Ⅱ」 加古川市教育委員会 1969年
田中幸夫・岡田功 「埋もれた古代のムラ」 加古川史学会 1979年
岡本一士・山本祐作・渡辺昇・友久伸子 「溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ」 加古川市教育委員会 1992年
西川英樹 「加古川市埋蔵文化財調査集報Ⅱ」 加古川市教育委員会 2003年

第3章 調査成果

第1項 発掘調査の概要

平成4年度の発掘調査は、個人住宅の建設予定に先立ち、国庫補助事業によって、調査を行った。調査は、平成4年6月29日に開始し、同年の10月29日まで実施した。調査区は、3ヶ所に分かれ、第1・第3調査区は岡本一士が担当した。第2調査区は、西川英樹が担当した。

第1調査区では、弥生時代の水田を2層、古墳時代の水田を4層確認した。弥生時代の水田は、1区画が約1.4m×約1m程度であった。古墳時代の水田は1区画が約0.9m×約1.1mのものと約1m×約1.4mのものが検出された。これらは、いずれも小区画水田である。

第2調査区は、第1調査区の東隣の調査区であるが、この場所は微高地上にあり、弥生時代の方形周溝墓や奈良時代の掘立柱建物跡が検出された。詳細は次項において記述する。

第3調査区は、第2調査区より南東に少し離れている。弥生時代の水田2層および古墳時代の水田4層そして水田とともに水路が検出された。弥生時代の水田からは、弥生人の足跡が検出された。足跡は長さ約24cmであった。歩幅約60cmで歩いた状況が確認された。北東に向かって歩いていた人物が、畔のところでいったん立ち止まった状況も確認された。この遺構は、加古川市内ではじめて検出された水田に伴う足跡である。

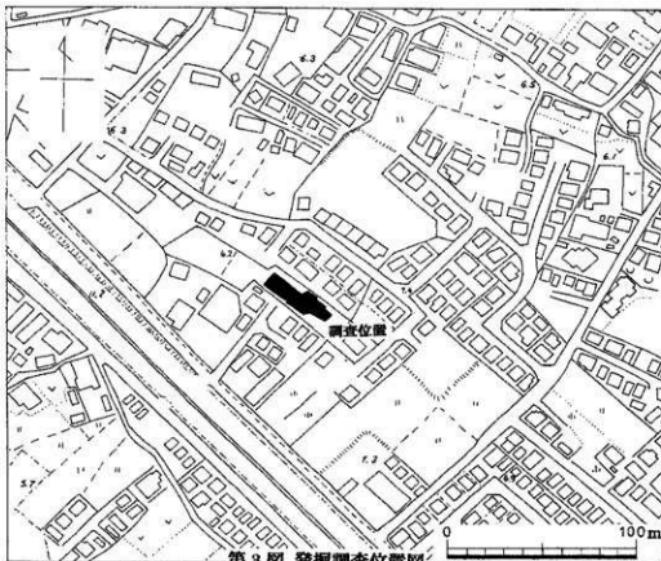
今回の発掘調査報告書では、西川が担当した第2調査区に関する報告を行う。



第1調査区遺構完掘状況



第3調査区遺構完掘状況



第2項 遺構

第2調査区は、調査面積約430m²で、調査以前の状態は水田である。調査は表土である現代耕作土をバックホーで掘削し、それ以下の遺構は、すべて人力によって掘削をおこなった。耕作土を除去すると、わずかな中間層があり、その直下で、遺構面が検出された。遺構面の土層は淡黄色粘質土であった。

A. 弥生時代の遺構

方形周溝墓1(SX01)

弥生時代中期の方形周溝墓である。大きさは、周溝底の傾斜変換点から計測すると、南北約5.4m×東西約5.4mとなる。しかし、北東側はやや広がりながら調査区外にのびているため、平面形は台形となる。上部は水田開発によって削平を受けており、そのため埋葬施設は検出されなかった。南周溝はSX02と共有する。溝幅は、約60cm～約1.3mである。深さは検出面から、北周溝で約20～約45cm、西周溝で約30cm～約35cm、東周溝で、約30cm～約45cmである。西周溝はSX01より、さらに北側にのびており、周溝墓が存在したと考えられる。

方形周溝墓2(SX02)

大きさは南北約5.8m×東西約5.6mで、ほぼ方形を呈する。北周溝および南周溝は

それぞれSX01、SX03と共有し、東周溝は、SX01とつながっている。西周溝は、SX01、SX03とつながっている。溝幅は約1.3m～約80cmで、深さは、検出面から北周溝で約40cm～約70cm、西周溝で、約45cm～約60cmである。上面は削平を受けており、そのため埋葬施設は検出されなかった。東南隅は、一部溝が途切れ、陸橋部となる。南周溝も一部が途切れている。東周溝に接して、長さ約1.3m、幅約70cm、深さ約60cmの溝が東側に向かってのびる。溝は、東端近くで、浅く、狭くなつて途切れている。

方形周溝墓3(SX 03)

南側が調査区外に出るため、部分的な検出である。南北検出長約2.4m、東西約6.5mとなる。北周溝は、SX02と共有している。西周溝はSX02と連続している。溝幅は約60cm～約1.7mである。深さは検出面から、東周溝で約50cm～約80cmである。上面は削平を受けている。

方形周溝墓4(SX 04)

部分的な検出であるが、他の遺構との比較から方形周溝墓であろうと判断した。北周溝と東周溝の一部を検出したのみである。北周溝は長さ約2.8m、幅約1m、深さは検出面から約60cmである。東周溝は検出長約5.6mm幅約1.2～1.3m、深さは検出面から約70cm～約80cmである。北東部と北西部に2箇所の陸橋部を有する。四隅が切れるタイプとなる可能性もあると思われる。

方形周溝墓5(SX05)

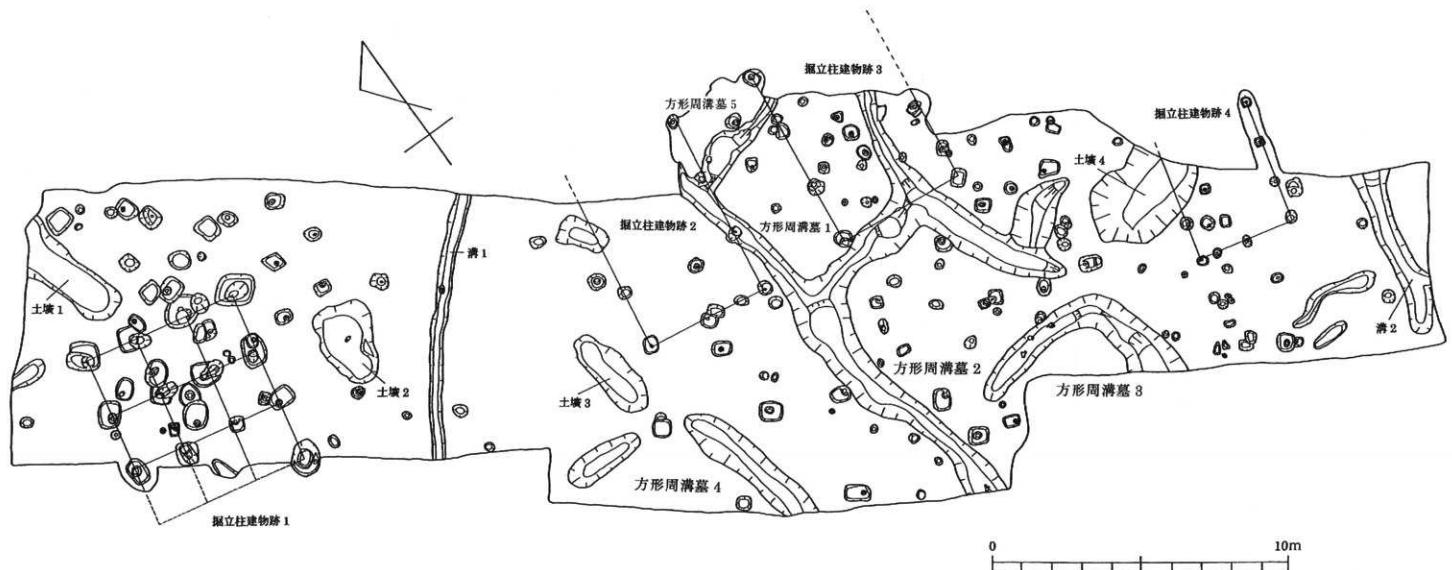
これは大半が調査区外となるが、検出の状況からSX01の北側に溝を接して築造されている方形周溝墓と考えられる。南周溝はSX01と共有している。西周溝は一部のみを検出した。他はすべて調査区外となる。

土壙1(SK01)

長方形を呈する土壙である。北側は調査区外となる。検出長約4.2m、幅約1.3m、検出面からの深さ約60cmとなる。埋土は、黒褐色粘質土から褐灰色粘質土が堆積している。

土壙2(SK02)

いびつなだ円形を呈する大形の土壙である。長さ約2.8m、最大幅約1.9m、検出面からの深さ約40cm～60cmとなる。埋土は黒褐色粘質土である。



第4図 溝之口遺跡遺構平面図

土壤3(SK03)

長方形を呈する土壤である。長さ約3.4m、幅約1.3m、検出面からの深さは約60cm～約70cmとなる。埋土は黒褐色粘質土である。位置、形状および埋土などから方形周溝墓の溝の可能性があると考えられる。

B.奈良時代～平安時代の遺構

掘立柱建物跡1(SB01)

調査区西側で検出した遺構である。北北東の方向に棟軸方向をとる。検出規模は、北辺約5.4m、東辺約6.0mで、3間×3間の総柱式建物である。南側は調査区外であるため、さらにはびる可能性もある。北辺の平均柱間距離は約1.4mである。東辺の平均柱間距離は約1.56mである。柱穴の掘方は、隅丸方形で、おおよそ一辺70cm～1.3mの規模である。深さは約50cm～約60cmである。柱痕は残存する物で、径約20cm～約25cmである。

掘立柱建物跡2(SB02)

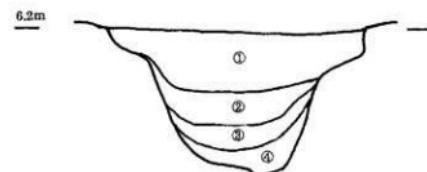
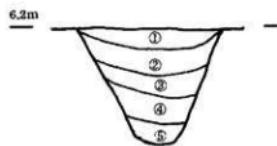
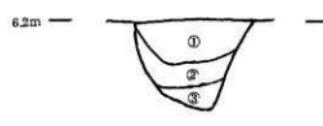
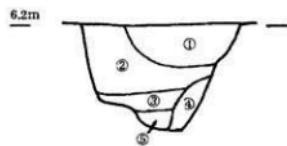
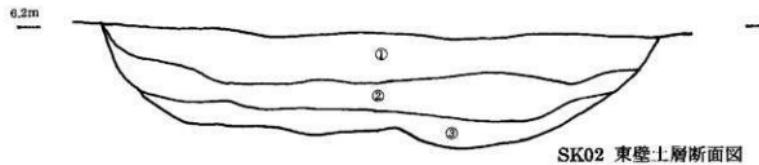
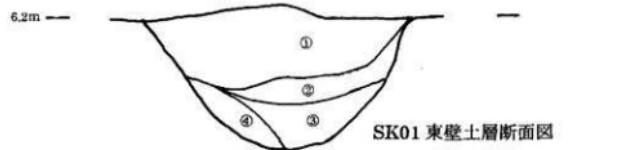
調査区中央部北側で検出した遺構である。北北東の方向に棟軸方向をとる。検出規模は、南辺約4.3m、東辺約6.4mで、2間×3間の側柱建物である。北側は調査区外であるため、さらにはびる可能性もある。南辺の平均柱間距離は約2.2mである。東辺の平均柱間距離は約2.2mである。柱穴の掘方は、隅丸方形ないし円形で、隅丸方形のものは、おおよそ一辺約50cm～約60cm程度の規模である。深さは約20cm～約30cmである。SB-02はSB03と建物の方向、規模、柱間距離などもほぼ同一の建物であると言える。

掘立柱建物跡3(SB03)

調査区中央部北側で検出した遺構である。北北東の方向に棟軸方向をとる。検出規模は、南辺約4.4m、西辺約6.4mで、2間×3間の側柱建物である。北側は調査区外であるため、さらにはびる可能性もある。西辺の平均柱間距離は約2.2mである。柱穴の掘方は、隅丸方形ないし円形で、隅丸方形のものは、おおよそ一辺約50cm～約60cm程度の規模である。深さは約18cm～約28cmである。柱痕は残存する物で径約15cm程度である。SB02とSB03は建物の方向、規模、柱間距離などもほぼ同一の建物である。

掘立柱建物跡4(SB04)

調査区東側で検出した遺構である。北北東方向に棟軸方向をとる。検出規模は、南辺約3.3m東辺約4.4mで、2間×3間の建物である。北側は調査区外であるため、さらにはびる可能性もある。南辺の平均柱間距離は約1.7mである。東辺の平均柱間距離は約1.5mである。柱穴の掘方は、円形ないし隅丸方形で、おおよそ径30cm～約40cmの規模である。深さは約12cm～約40cmである。



第5図 土層断面図(S=1/20)

SK01土層

- ①黒褐色(10YR2/2)弱粘質細砂1~3cm礫少し含む
- ②暗褐色(10YR3/3)弱粘質細砂
- ③黒褐色(10YR3/2)弱粘質細砂
- ④褐灰色(10YR4/1)弱粘質細砂 にぶい黄褐色細砂を含む

SK02土層

- ①黒褐色(5YR2/1)弱粘質細砂
- ②黒褐色(7.5YR2/2)弱粘質細砂
- ③黒褐色(7.5YR3/2)弱粘質細砂

SX01北周溝土層

- ①黒色(10YR2/1)弱粘質細砂
- ②黒褐色(10YR2/2)弱粘質細砂
- ③黒色(10YR2/1)中粘質極細砂
- ④黒褐色(10YR3/1)中粘質細~中砂
- ⑤黒褐色(10YR2/2)弱粘質極細砂 1mm以下白砂含む

SX02北周溝土層

- ①黒色(10YR2/1)弱粘質細砂
- ②黒褐色(10YR2/2)弱粘質細砂
- ③黒色(10YR2/1)中粘質極細砂

SX02東周溝土層

- ①黒色(5YR1.7/1)弱粘質中砂 1~3cm程度礫含む
- ②黒色(7.5YR2/1)弱粘質細砂
- ③黒褐色(7.5YR3/1)弱粘質細砂
- ④黒褐色(7.5YR3/1)弱粘質極細砂
- ⑤褐灰色(7.5YR4/)弱粘質細砂

SK03土層

- ①黒褐色(10YR2/2)弱粘質細砂~極細砂
- ②黒褐色(10YR2/3)弱粘質極細砂
- ③暗褐色(7.5YR3/3)弱粘質極細砂
- ④褐灰色(10YR4/1)弱粘質極細砂

溝 (SD01)

北東方向から南西方向に流れる溝である。検出長約9m、幅約50cm、検出面からの深さは約8cmとなる。埋土は黒褐色粘質土である。

溝2 (SD02)

北から南に流れる溝であるが、南端で途切れている。北側および東側の一部は、調査区外までのびる。検出長約5.76m、幅約80cmである。検出面からの深さは約36cmとなる。断面形は逆台形である。

C. その他の遺構

土壙4 (SK04)

いびつな長だ円形を呈する大形の土壙である。検出長約3.5m、幅約2.7m、深さ約80cmとなる。北側は調査区外となる。埋土は褐色縛混じり砂質土である。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、SB04の柱穴を破壊しており、この遺構より新しい。

第3項 遺物

出土した遺物は、土器、瓦などである。遺物の出土量は決して多くない。本報告書において報告する遺物は44点である。

1は弥生土器短頸壺広口壺である。SX04の東周溝埋土第2層より出土した。口径18.0cmである。体部は外面に縦方向のはけを施す。口縁部は横なでを施す。色調は、外面淡黄色、内面灰白色を呈する。

2は弥生土器壺底部である。SX04東周溝埋土第2層より出土した。底径9.0cm、外面に縦方向の範みがきを施す。色調は外面淡黄色、内面灰白色となる。

3は弥生土器底体である。底径6.0cm、残存高9.1cmとなる。SX01北周溝埋土第3層より出土した。内外面とも摩滅、剥離している。外面黄橙色、内面淡黄色を呈する。

4は弥生土器高壺の壺部である。径15.0cm、現存高7.2cmである。SX03周溝埋土より出土した。

5は弥生土器壺である。SX02西周溝埋土第3層より出土した。口径14.5cm、残存高14.0cmとなる。底部を欠く。器壁は薄い。口縁部は横なでを施す。体部外面は、縦はけを施す。内外面摩滅している。

6は弥生土器底部である。SX02西周溝2~3層の間で出土した。底径7.2cm、残存高4.0cmとなる。外面淡黄色、内面暗灰色を呈する。

7は須恵器台付皿である。SB01柱穴1より出土した。口径13.9cm、底径9.6cm、器高2.3cm、高台径7.0cmとなる。内外面横なでを施す。底部は回転斂切りとする。色調は内外面灰

色となる。

8は坏Aである。口径14.0cm、器高3.6cm、底径9.8cmである。内外面に火燐痕を有する。口縁、体部を回転なで、底部は回転箝切りとする。SB01柱穴内より出土した。

9は坏H身である。口径14.6cm、残存高3.2cmとなる。口縁部の立ち上がりは1cmで端部を丸く收める。坏部は上部に回転なで、下部に回転箝削りを施す。

10は坏Aである。口径15.0cm、底径9.8cm、器高3.0cmとなる。口縁部、体部は回転なで調整とし、底部は回転箝切り後、なで調整としている。色調は灰色～赤色を呈し、一定していない。

11は弥生土器底体部である。遺構面より出土した。底径4.5cm、残存高5.9cmである。内外面とも摩滅している。色調は外面淡褐色、内面灰白色となる。

12は弥生土器底部である。遺構面より出土した。底径4.4cm、残存高5.0cmとなる。底部外面に縦方向の箝削りを施す。色調は黒灰色から赤色を呈する。

13は飯蛸壺である。遺構面より出土した。口径4.8cm、体部の最大径は7.7cm、残存高5.5cmとなる。底部を欠く。外面は摩滅している。内面は横なでを施す。色調は淡黄色を呈する。

14は羽釜である。遺構面より出土した。体部を欠いている。口径29.0cm、残存高6.9cm、鉢部径34.0cmである。色調は赤褐色で、胎土中に角閃石を含む。搬入品である。このタイプの羽釜は、溝之口遺跡においてしばしば見られる。

15は棒状有孔土錘である。端部の一部を欠いている他は、ほぼ完形である。断面円形を呈し、両端に紐孔を穿っている。孔径は、上下ともに6.5mmである。

全長8.2cm、胴部最大幅1.6cmである。重量29gである。灰白色を呈し、須恵質である。

16は弥生土器壺底体部である。底径9.6cm、残存高25.0cmである。体部は中位が大きく張る。上位に獅子直線文を施す。体部下位から底部に縦方向の箝磨き、体部中位に横方向の箝磨きを施すと思われるが、表面の摩滅がひどいため、観察が困難であり、明瞭さを欠いている。内面も全体的に摩滅しているため、調整等は観察できない。

17は弥生土器甕である。採集資料である。口径21.2cm、残存高10cmである。口縁部内外面に横なでを施し、端部は丸く收める。体部外面に縦はけ目調整を施す。

18は弥生土器広口壺口縁部である。採集資料である。口径24.4cm、である。口縁部は大きく水平に開く。端部を下方に引き下げて拡張し、端面には箝による斜線文を施す。摩滅がひどいが、口縁部内外面に横なで調整を施している。色調は外面赤橙色、内面淡黄色となる。

19は弥生土器底部である。SK01埋土より出土した。底径6.4cm、残存高5.0cmである。色調は内面浅黄橙色、外面淡黄色となる。

20は弥生土器底部である。底径7.8cm、残存高2.2cmである。内外面ともに摩滅している。色調は内外面ともに淡黄色である。採集資料である。

22は弥生土器底部である。底径は3.2cmで小さい。残存高は3.6cmである。内外面ともに摩滅している。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。採集資料である。

23は弥生土器底部である。底径4.4cm、残存高4.7cmである。外面に水平方向の叩きを施し、後に縦はけを施す。内面は摩滅している。色調は外面灰白色から橙色、内面は灰白色から黒色を呈する。採集資料である。

24は高坏の脚部である。中実である。表面は摩滅、剥離している。色調は内外面ともに淡橙色である。採集資料である。

25は高坏の脚部である。中空である。表面は摩滅している。採集資料である。

26は坏H蓋である。口径15cm、器高3.8cmである。外面に凹線が巡る。採集資料である。

27は坏H身である。受部は外上方へ短くのびる。立ちあがりは低く内傾する。暗灰色を呈し、焼成は良好である。

28は坏H身である。受部は外上方へ短くのびる。立ちあがりは低く内傾する。立ちあがり基部内面に稜がめぐる。灰色を呈し、焼成は良好である。採集資料である。

29は坏H身である。SD02上～中層より出土した。受部は外上方へのびる。立ちあがりは非常に低く、内傾する。立ちあがり基部内面に稜がめぐる。灰白色を呈し、焼成は良好である。

30は坏H身である。受部は短く外上方にのびる。立ちあがりは低く内傾する。立ちあがり基部内面に稜がめぐる。灰色を呈する。採集資料である。

31は内面にかえりをもつ坏蓋である。口径15.0cm、採集資料である。

32は坏B蓋である。口径18.0cm、器高2.4cmである。平坦な天井部である。天井部と口縁部の間に段が生じる。端部は直角ぎみに折り曲げる。採集資料である。

33は坏B蓋である。口径22.0cmである。天井部は平坦である。天井部と口縁部の間に段が生じる。端部は直角に折り曲げる。灰白色を呈する。胎土は精良である。採集資料である。

35は坏B身である。口径12.4cm、器高3.7cmである。灰白色を呈する。口縁部、坏部は回転なし、底部はへら切り後、ていねいな回転なしを施す。採集資料である。

36は須恵器台付皿である。口径14.8cm、器高2.0cm、高台径7.9cm、高台高5.0mmである。灰色を呈し、胎土は精良である。体部は外傾して立ちあがり、口縁部は外方に折り曲げる。体部内外面ともに回転なしを施す。底部はへら切り後、なで調整を施す。採集資料である。

38は須恵器壺口縁部である。灰色を呈し、焼成は良好である。長く外傾する頸部に大きくL字状に開く口縁部が付く。口縁部は下端部を外方に突出させている。頸部外面を回転なしで、下部に回転かき目を施す。頸部内面は回転なしで調整である。

39は棒状有孔土錐である。断面は円形となる。下半部を欠損している。両端に紐孔を穿つ土錐である。孔径は8mmである。残存長5.6cm、胴部径1.8cm、重量26gである。淡黄色で土師質である。採集資料である。

40は棒状有孔土錐である。断面は円形となる。下半部を欠損している。両端に紐孔を穿つ土錐である。孔径は8mmである。残存長5.1cm、胴部径2.0cm、重量27gである。

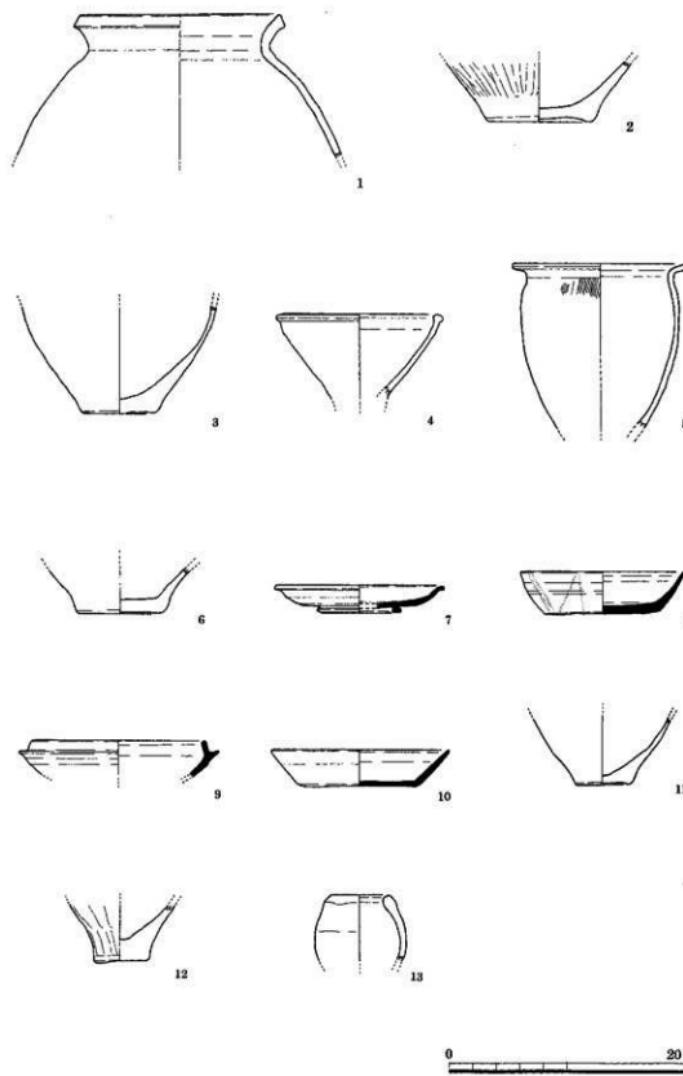
淡黄色を呈し、土師質である。遺構面より検出された。

41は須恵器捏鉢口縁部片である。口縁端部が肥厚する。内外面横なでである。採集資料である。

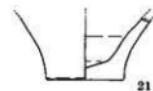
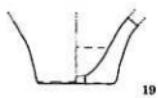
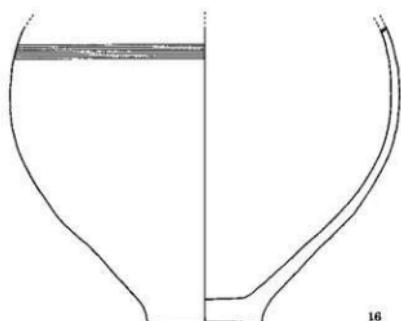
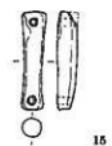
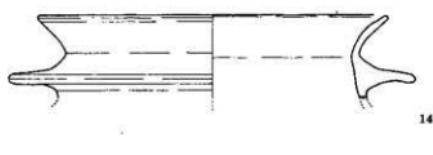
42は平瓦片である。凸面は斜格子状の叩き目が残る。凹面は布目圧痕が残る。

43は平瓦片である。凸面はなで調整である。凹面には布目圧痕が残る。

44は平瓦片である。凸面は斜格子叩き目、凹面には布目圧痕が残る。42から44はすべて採集資料である。



第6図 溝之口遺跡遺物実測図



0 20 c m

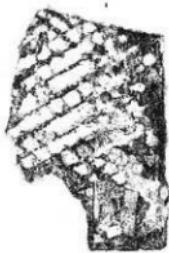




42



43



44



第4章　まとめ

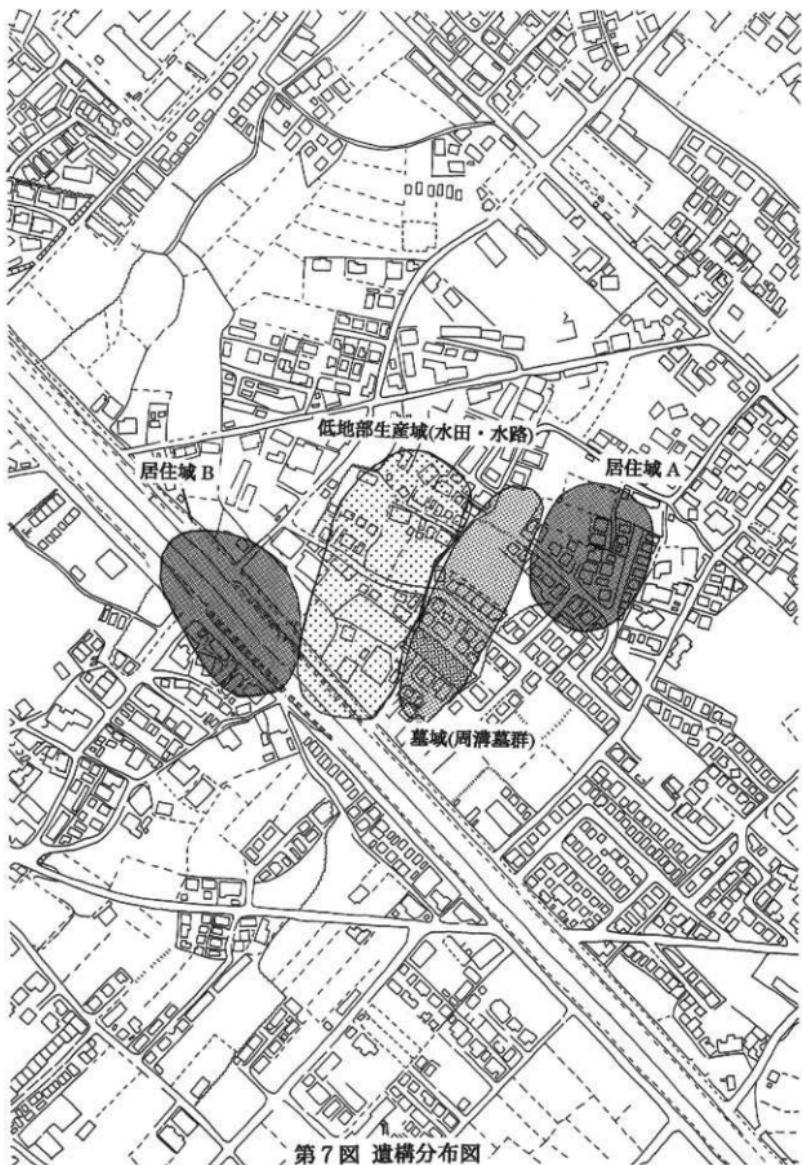
今回の発掘調査によって明らかになった事柄について、既存の調査結果と照らしながら、特に弥生時代の方形周溝墓の状況と美乃利遺跡との時期的関係、掘立柱建物跡の時期について、まとめてみたいと思う。

1 方形周溝墓について

今回の発掘調査では、方形周溝墓5基以上を検出した。周溝墓は、溝を共有し、南北方向に列状に築造されている。規模は、一辺約5~6m程度である。溝は断面V字に近いU字形で、端を船底状に浅くし、陸橋部をもつ。主体部は、削平のため検出されていない。方形周溝墓1~3、5の列と方形周溝墓4との間には幅約3.5m程度の空閑地があり、これを墓道として把握できる。

都出比呂志氏は、「3基前後の墳丘が、時期を異にしつつ順次継続して営まれ、かつそれら3基前後が溝を接しあうなどの緊密な関係を維持していることから、これらは世代を異にした世帯が2~3世代にわたり累世的に営んだ墓域と考える事が出来よう」とし、3基前後の単位が数単位集まつたものを支群とした。(都出1989)。岸本一宏氏も「方向を同一にしたり、溝を共有したり接」している周溝墓を「小群」とし、さらにそのまとまったものを「群」として捉えた(岸本1988)。今回の調査における列状に連なる周溝墓群も、都出氏のユニット、岸本氏の小群に相当すると考えられる。したがって今回調査区で2列認められたことは、複数のユニット・小群が存在する事になる。

溝之口遺跡の既存の調査例と照らして考えると、今回調査地の北側に位置する1983年度第1次調査区では、方形周溝墓4基が検出されており、周溝墓1、2、4は北東から南西方向に築造されている。この方向は、今回調査地の方向とは違う方向である事から、これらは、また別の単位、「小群」と考えられる。時期が不明瞭な資料を除くと、弥生時代Ⅲ期が6基、Ⅲ~Ⅳ期とされるものが5基である。今回検出された方形周溝墓は出土土器から考えてⅢ~Ⅳ期の築造である。これらは、溝之口遺跡の盛期によく対応していると考えられる。これらの周溝墓の群集状況では、溝を共有するもの、連接するもの、隣接するが、溝を接しないものなどに分けられる。また、方形周溝墓だけで構成される「小群」と、方形周溝墓と円形周溝墓が混在する「小群」が見られる。溝之口遺跡で検出された過去の周溝墓は、14基で1基の円形周溝墓が含まれるが、大半が方形周溝墓である。溝之口遺跡においては、方形周溝墓と円形周溝墓が混在しているが、方形周溝墓が主体を占めていると言うことができる。これらの周溝墓群は、水田などの生産域として使用された低地部の東側に存在する微高地の縁辺を墓域として築造されており、複数の「小群」がまとった「群」を形成しているものと考えられる。



第7図 遺構分布図

2.掘立柱建物について

今回の調査において、検出された掘立柱建物跡は4棟である。これらのうち、SB01は縦柱建物で、柱穴内より須恵器が2点出土している。須恵器は、壺Aと台付皿である。壺Aは、底部と体部の境界に明瞭な稜ができるなど、形態的な特徴から9世紀代の土器と考えられる。

台付皿は、志方窯跡群の投松1号窯・3号窯などにおいてよく見られるタイプのものである。森内秀造氏による志方窯跡群の須恵器編年によれば、これも9世紀代の土器と考えられる。

他の建物跡からは遺物が出土していないため、明確な時期は不明であるが、建物の棟軸方向を北北東にはぼそろえており、いずれも近い時期の建物跡ではないかと推測される。建物の性格は、SB01を倉庫、SB02・03・04を住居と考える事ができるだろう。

3弥生時代における遺構の分布について

第7図は、弥生時代における溝之口遺跡遺構分布図である。この図は、今まで公表されている発掘調査報告書の資料から作成したものである。発掘調査は宅地開発などに伴って行われるため、多くの未調査部分がある。遺跡全体の広がりもいまだ不明である。それらの点を踏まえた上で作成したおおよその遺構分布範囲図である。

この図から、溝之口遺跡は現状の調査において、水田・水路などに利用された低地部を挟んでその東側と西側に居住域が存在した状況が伺われる。周溝墓群は、低地部東側の微高地縁辺部を利用して営まれた。その東側に居住域Aが設けられ、豎穴住居が建てられた。居住域Aの南側にも水田や溝が確認されており、生産域として利用されていたと考えられる。この地域の水田遺構から、弥生人の足跡が検出された。低地部の西側に存在する居住域Aからは、III～IV期の豎穴住居跡、土墳など多数の遺構が検出されている。現状では、木棺墓2基は検出されているが、方形周溝墓群などは検出されていないため、墓域の設定は現状ではできていない。V期の状況は居住域Bでは、豎穴住居跡5棟が検出されているが、居住域Aでは、顯著な遺構はみられず、集落の規模の縮小があったと考えられる。報告では、V期前半の豎穴住居跡1棟、V期後半の豎穴住居跡4棟、同じくV期後半の溝などが検出されている。

溝之口遺跡の北側に隣接する美乃利遺跡との関係は、報告書において検討されているが、再度確認したい。美乃利遺跡は弥生時代I期から営まれ、この時期の大規模な水田も検出されている。同時期の溝之口遺跡は遺構・遺物ともに乏しい。III期の遺構・遺物は、溝之口遺跡において非常に多い。しかし、美乃利遺跡においては乏しい。集落の中心が美乃利遺跡から溝之口遺跡へ移動した感がある。IV期は、溝之口遺跡・美乃利遺跡双方とも遺構・遺物があり、規模の拡大した時期である。V期前半は、溝之口遺跡において豎穴住居跡1棟が確認されているが、美乃利遺跡では遺構は確認されていない。V期後半は、双方ともに確認されているが、溝之口遺跡では、主に遺跡の南側で

確認されており、別々の集落の様相を呈している。

また、2005年の発掘調査では、従来の調査地より南側のJR線沿いにおいても加古川市教育委員会による発掘調査が実施されており、弥生時代後期・古墳時代中期・奈良時代などを主体とする各時代の遺構・遺物が多く出土している。

参考文献

- 都出比呂志 「日本農耕社会の成立過程」岩波書店 1989年
- 岸本一宏 「近畿地方の弥生時代墳丘墓について—集落構造把握への一視点として」『網干善教華甲記念 考古学論集』
網干善教華甲記念会 1988年
- 岩松保 「墓域の中の集團構成」『京都府埋蔵文化財情報大44号・45号』
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年
- 森内秀造・仁尾一人・高木芳史・岡本一秀 「志方窯跡群Ⅱ—投松支群—」
兵庫県教育委員会 2001年
- 山田清朝・菱田淳子・中村弘・矢野治巳 『美乃利遺跡』
兵庫県教育委員会 1997年

写 真 図 版



0 10 20 30 40 50m



調査区全景写真
(西より)



調査区全景写真
(東より)



SK01 完掘状況



S0B1



SX04、SK03
(西より)



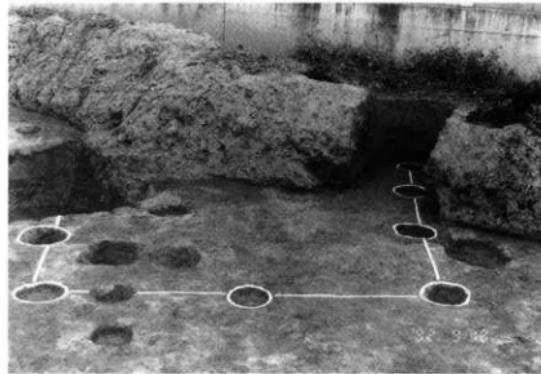
SX01、SX02
(西より)



SX01、SX02、SX03
(南より)



調査区全景写真
(西より)



SB03
(南より)



SD02



SX02、SB03、SK04



1



6



2



7



3



8



5



10



11



17



12



26



14



35



16

写真図版八



42 43 44 42 43 44



9 13 15



18 19 20 21



22 23 24 25



27



28



29



30



4



31



32



33



34



36



37



38



39



40



41

報 告 書 抄 錄

フリガナ	ミゾノクチイセキハックツチョウサホウクショニ							
書名	溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ							
シリーズ名	加古川市文化財調査報告							
シリーズ番号	20							
編著者	西川英樹							
編集機関	加古川市教育委員会 文化財調査研究センター							
所在地	加古川市平岡町新在家1224-7							
発行年月日	平成18年3月25日							
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
溝之口遺跡	兵庫県 加古川市 加古川町 美乃利 354他	市町村 28210		34度 45分 58秒	134度 51分 3秒	平成4年 6月29日～ 平成4年 10月29日	430m ²	民間開発
所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項			
溝之口遺跡	集落跡	弥生時代 ～ 平安時代	方形周 溝墓 掘立柱 建物跡 溝 土壤	弥生土器 土師器 須恵器 瓦				

加古川市文化財調査報告20

溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ

発行 加古川市教育委員会

編集 文化財調査研究センター

加古川市平岡町新在家1224-7 TEL0794-23-4088

印刷 稲垣印刷

加古川市野口町古大内451-1 TEL0794-26-6653

平成18年3月25日 発行
